

新聞」よりの抜萃。

- 6 CNT文書よりの抜萃。
 Gaston Léval フランスのアナルコ・サンジカリスト、
 三二二ページに見られるように、一九三六年の革命よりず
 っと以前から、スペインのアナルコ・サンジカリズム運動
 に緊密に結びついていた。イタリヤ語訳「反フランコ反ス
 ターリン」よりの抜萃。別の題名で、近くフランス語版が
 刊行される。「絶対自由主義スペイン」の表題の下に、一
 九七一年、ラ・テート・ド・フュー社、パリ、から刊行さ

れた。——訳者)

- 8 カタルニャ政府の経済大臣になったD・A・デ・サンティ
 リヤンは、この図式を一九三六年七月十九日の革命前に発
 表した。(彼の書「革命の経済組織」、一九三六年、からの
 抜萃)
 9 ディエゴ・アバ・デ・サンティリヤンの未発表の手紙。
 一九三六年五月に、サラゴサでのCNT大会で可決された
 綱領(Ⅰ巻二七九ページおよび二八五—六ページを見よ)
 のいくつかのエリートビ的な条項への当てこすり。

ヴォーリン 1882 - 1945

ヴォーリンの仮名の方がよく知られている、フセヴォロー
 ド・ミハイロウィッチ・エイヘンバウムは、一八八二年八月十
 一日に生まれた。セント・ペテルスブルグ大学の法科に籍をお
 いたが、すでに社会革命党に惹かれていた彼は、間もなくそれ
 を放棄する。彼は、社会革命党によって、一九〇五年の革命に
 積極的に参加することとなる。彼は、ガボン司祭に先導された
 冬宮への労働者の行進に参加した。しばらくして、彼は、セン
 ト・ペテルスブルグの最初のソヴェトの誕生に協力する。ツァ
 ーの警察に逮捕され、投獄され、結局、シベリアに流刑にされ
 たのち、一九〇七年に、首尾よく逃亡して、フランスにたどり
 着く。

ヴォーリンがアナキストになったのは、パリにおいてであ
 る。一九一三年以来、反戦国際行動委員会のメンバーとなり、
 彼の活動は、一九一五年には逮捕に価するものとなる。政治犯
 収容所に監禁されかねなかったヴォーリンは、商船に船艙係と
 して乗り込むことに成功し、その船で、アメリカ合衆国にゆ
 く。それ以前に何か月にもわたって、彼はすでに、アメリカに

あるロシアのアナルコ・サンジカリストの週刊紙「労働の声」
 に、パリ通信を送っていた。一九一七年に、編集部は——それ
 とともにヴォーリンも——、この週刊紙をセント・ペテルスブ
 ルグに移転する目的で、革命ロシアに帰る。

この時期、(ピョートル・クロボトキンの思想の影響下にあ
 った)ヨーロッパに残っていたロシアのアナキストたちと、ア
 メリカに滞在していたロシアのアナキストたちの間には、統一
 行動が確立されており、それは声明によって、ついで、当時、
 ベトログラード・アナルコ・サンジカリスト宣伝同盟を名乗っ
 ていた組織によって、現わされていた。その同盟が、アメリカ
 版の延長と見なされていた「労働の声」の発行を決定し、ヴォ
 ーリンはその編集者に選ばれる。十月革命のち、「労働の声」
 は日刊紙となり、ヴォーリンは編集委員会に加わる。そこには、
 なかんずく、アレクサンドル・シャピロが重要な役割を
 果たしていた。

プロレタリア革命後まだ数カ月しか経っていない頃、ヴォー
 リンは、この新聞の中で、怖ろしいほど予言者的な警告をす

に発している。「ひとたび彼らの権力が強化され、合法化されたら、ボリンシェヴィキたちは……政府中心的な、独裁的な手段で、国と民衆の活動を整理し始めるであろう。……諸君のソヴェトは、次第に、中央政府の意志の単なる執行機関になるであろう。上から行動し、すべてをその鉄拳で粉砕し始める、国家主義的な政治的権威主義的機構の設置が見られることであろう。……中央権力と一致しないものには不幸が訪れよう！」

しばらくのちに、この新聞を離れたヴォーリンは、ポプロフにゆく。そこで彼は、町のソヴェト部門で働く。その後すぐ、彼は新聞「警鐘」に移り、そして、一九一八年十一月十八日に、クルスタで開かれた、ウクライナのアナキスト会議の、中心活動家たちと結びつく。この会議で彼は、議決された決議案を起草し、唯一の連合体の中で皆が活動できるようにするため、アナキズムのあらゆる傾向によって受け入れうる声明を作成することを引き受けた。この綱領の起草が、アナキズムの三つの潮流、アナルコ・サンジカリズム、自由共産主義、個人主義を統合しなければならぬ、「アナキズムの総合」の思想を明言するように、ヴォーリンを導く。

ナバートの第二回大会は、一九一九年の三月から四月にかけて行なわれた。その参加者たちは、「権威主義的な、中央集権的な、国家主義的な基礎の上に組織された、単に政治的な機関と化した、ソヴェトへのあらゆる参加に、明確に、決定的に、反対する」と表明した。この声明は、ボリンシェヴィキ権力によってきわめて冷遇された。

大会のち、ヴォーリンはモスクワを離れ、クルスタの「警鐘」のために、中央機関紙（というのもそれは、地方版を持っていただけ）のために、働くことに戻る。それはまだ、比

較的、政治的寛容の時期であった。しかし、それは長く続くはずはなかった。間もなく、ボリンシェヴィキは、自由な言論を禁止し、アナキストたちを追求し、逮捕した。ヴォーリンが、ネストル・マフノのウクライナのアナキストゲリラ地区にたどり着いたのは、この時期、七月のことである。慧眼な文筆家の知識人と比較的粗野な農民ゲリラは、彼らが大きく違っているという事実によって、相互に補いあった。しかし、一度ならず衝突しなかつたわけではない。

マフノ運動が、文化と教育の部門を設置したので、ヴォーリンは、マフノの牢獄時代の古い仲間、ビョートル・アルシノフと協力して、その先頭に立ち、集会、講演会、討論、住民への助言を組織すること、ピラヤボスターの編集、その他いっさいのマフノ運動の出版を引き受けた。彼は、反乱運動の議長をつとめた。「自由ソヴェト」の理論を明確にした一般テーゼは、そこで可決された（一六六ページを見よ）。

軍事評議会の中にあつて、ヴォーリンは、六カ月の間、惜しみにくく尽力した。しかし、彼は赤軍第十四軍によって逮捕され、モスクワに連行され、政治警察（チェカー）の手中に渡された。彼は、ボリンシェヴィキ政府とマフノとの軍事協定のおかげで、一九二〇年十月になって、やっと釈放された。そこで彼はハリコフに戻り、彼はナバト連盟とともに、十二月二十五日のアナキスト大会の準備をする。この大会の直前、ボリンシェヴィキたちは、マフノとともに闘つたアナキストたちとともに、またはヴォーリンを逮捕した。

ハリコフの囚人たちはモスクワに移送され、ブーチルキ監獄に投獄された。彼らはそこでハンガーストライキに入るが、

それは思いがけない介入のち、中止される。すなわち、赤色労働組合インターナショナルの第一回大会に出席するために来ていたヨーロッパの革命的サンジカリストが、彼らのうち十人の釈放の許可をえたのである。その中には、永久追放という（協定を破った場合は死刑という脅しを伴う）条件の下での、ヴォーリンも入れられていた。

ドイツに移り、そこでベルリンにあつた自由労働者同盟によって救助されたヴォーリンは、この同盟のために働き、重苦しい小冊子「ソヴェト・ロシアにおけるアナキズムへの迫害」を発表し、ビョートル・アルシノフの書「マフノ運動史」をフランス語に翻訳する。彼はそれらを、ロシア語の重要な週刊誌、アナキズム総合の雑誌「アナキズムの先触れ」を創刊し、編集しながらしたのであつた。

彼にフランスに来るように勧めていたセバスチャン・フォーレルの示唆の下に、ヴォーリンは、「アナキズム大百科」に協力する。彼はそこに、宣伝パンフレットとして、あるいは、外国の、特にスペインの新聞に、しばしば再録された諸研究を書いた。スペインのCNTは、CNTのために、同組織のフランス語の新聞「反ファシスト・スペイン」を編集することを彼に求めた。

一九三八年、ヴォーリンはパリを離れてニームにいった。そこで印刷協同組合を指導していた彼の友、アンドレ・ブリエドモオが、彼を招いたのである。彼はそこで、しばらくの間、週刊誌「自由な土地」の編集に参加していた。またそこで、特に、彼は、ロシア革命についての絶対自由主義の古典であり、アナキズムの最も重要な著作の一つ、「知られざる革命」を、歳月の隔たりが与える円熟をもって、静かに書くことができ

た。ついで、マルセイユで、一九四〇年以來、ヴォーリンは、彼の書を完成することができた。結核に冒され、彼は、一九四三年九月十八日、パリで死んだ。「知られざる革命」は、ヴォーリンの友人たちの配慮と負担によって、一九四七年に発表された。それは長い間知られず、また「権威主義的」革命家たちによって、押し隠されてきた。それは再版されたおかげで、一九四九年になってやっと、多数の人々の眼に触れることができたのである。

知られざる革命

ヴォーリンとトロツキー

一九一七年四月、私は、ニューヨークの、特にロシアの左翼各種機関のために仕事をしていて、印刷所でトロツキーと再会した。彼は当時、左翼マルクス主義の日刊紙『新世界』を指導していた。私はといえば、ロシア労働者同盟連合が、ロシアへ出発する前の『労働の声』紙、アナルコ・サンジカリズムの傾向の『労働の声』の、最後の諸号の編集を私に委せてくれていたのである。私は、新聞発行の前夜、週に一晚、印刷所に立ち寄っていた。そんなふうにして、私は最初の仕事の夜に、トロツキーと出会った。

もちろん、われわれは革命について話した。われわれは二人とも、間もなく「あちら」に帰るために、アメリカを離れる準備をしていた。

一度私はトロツキーにいった。「まったく重苦しい思いをしている私は、君たち左翼マルクス主義者たちが、結局はロシアで権力を奪うことを、絶対に確信してい

る。それは、宿命的だ。なぜなら、生き返ったソヴェトは、必ずブルジョア政府と紛争を起こすだろう。政府は、各ソヴェトを破壊するにいたらないだろう。なぜなら、国のすべての働くものたち、労働者たち、農民たち、等々、そしてまたほとんど全軍隊が、当然、ブルジョアジーとその政府に反対して、ソヴェトへ味方することと終わるだろうからだ。さて、民衆と軍隊がソヴェトを支持する時、ソヴェトは始められた闘いの中で勝利をうるだろう。そして、ソヴェトが勝利を得る時、必然的に、権力に到達するのは、君たち、左翼マルクス主義者だ。なぜなら、労働者たちは、確かに、革命をその最も進んだ表現にまで追求するだろうからだ。サンジカリストやアナキストは、自分たちの思想に労働者たちの注意を急速に惹きつけるには、ロシアではあまりに弱すぎるから、大衆は、君たちを信用するだろう。そして、君たちが「国の主人」になるだろう。その時、われわれ、アナキストたちに気をつけたまえ！君たちとわれわれの間での争いは、避けがたい。君たちは、君たちの権力が強化されるや否や、われわれを迫害し始めるだろう。そして、君たちは結局、われわれを鴉鳥のように銃殺するだろう……」

トロツキーは反駁した。「——やれやれ、ばかな。同志よ、君たちは頑固な度しがたい思想家だ。いいかね、現に何がわれわれを引き裂いているのだ。まったく第二義的な、方法上の小さな問題だ。われわれのように、君殺するといったばかげたことを、ほんの一瞬でも本当に認めることができるのか？とにかく、われわれは社会主義者だ、同志ヴォーリンよ。だから、われわれは君たちの敵ではない……」

一九一九年十二月、ひどい病気であった私は、マフノー運動の地域で、ポリシェヴィキ軍事当局によって逮捕された。私を「マークすべき」活動家と見なした当局は、私の逮捕を特別電報でトロツキーに通知し、私についての措置を彼に求めた。回答は、やはり電報によって到着した。それは素早く、簡潔で、明確であった。「即時に銃殺せよ。——トロツキー」。私は銃殺されなかった、ひとえに、まったく思いがけない、特別に幸運な状況の力添えのおかげで。

ポリシェヴィズム批判

見放された労働者階級

……労働者階級は弱体であった。(言葉の真の意味で)組織されておらず、無経験で、事実、彼らの真の任務について自覚していなかった労働者階級は、彼ら自身のために、彼ら自身でただちに行動することができなかった。彼らは、行動を横領する、ポリシェヴィキ党に頼った。

……革命を成就しようとする彼らの努力の中で、労働

たちは革命家だ。君たちのように、要するに、われわれもアナキストだ。ただ、君たち、君たちは、過渡期も準備もなしに、君たちのアナキズムをただちに樹立しようとする。それに反して、われわれマルクス主義者たち、われわれは、絶対自由主義的な王国に一飛びで「飛び込む」ことができる、とは信じていない。われわれは、アナキズム社会のための土壌が、反ブルジョア的な権力、つまり権力の座にあるプロレタリア党によって行使されるプロレタリアートの独裁の援けをえて、整備され開拓される、そういう過渡期を予想している。要するに、問題は「ニエアンスの」違いではない。それ以上じゃない。実際は、われわれは双方ともに非常に身近なんだ。われわれは戦友だ。だから考えたまえ。われわれは闘うべき共同の敵を持っている。われわれ同士が闘うことが考えられるだろうか？それに、私は、社会主義的な、一時的な、プロレタリアート独裁の必要を、君たちがすぐに納得するだろうことを疑ってはいない。だから私は、君たちとわれわれとの間の戦いのための理由を、本当に考えられない。われわれは、確かに手と手を結んで進むだろう。そして、われわれがもし一致しないとすれば、君たちは、われわれ、社会主義者たちが、アナキストに対して暴力を用いるだろうと仮定して、極端なことを考える！活動それ自身と大衆の意見が、問題を解決し、われわれを一致させるのに十分だろう。否！君たちは、権力の座にある左翼社会主義者がアナキストを銃

者たちに単に協力するかわりに、彼らの闘いの中で彼らを援助するかわりに、労働者たちが彼らの思想の中で当てにしている役割、普通、すべての革命的思想家のものでなくてはならない、「政治的権力」の獲得も行使もいささかも要求しない役割、この役割を果たすかわりに、ポリシエヴィキ党は、ひとたび権力の座につくや、当然のことながら、そこで絶対的な主人となった。それは、そこで墮落した。それは、特権的な集団となった。続いてそれは、自分自身の利益のために、新しい形で搾取するために、労働者階級を粉砕し、屈服させた。

このことから、革命は、歪曲され、逸脱され、道に迷わされた。なぜなら、人民大衆が誤ちと危険とを理解した時、それはあまりに遅すぎたからである。強固に組織化され、物質的な、行政的な、十分な警察と軍の、力を自由にしうる、新しい主人たちと人民大衆たちとの闘い——約三年つづいた、長い間ほとんど知られない、激しい、しかし不平等の闘いのおとで、民衆は力尽きた。解放のための真の革命が、一度ならず、「革命家たち」自身によって、圧殺された。

……一九一七年十月以来、ロシア革命は、まったく新しい領域、大社会革命の領域に入った。それは、そうして、まったく未踏の、きわめて特殊な道を進んだ。革命のその後の歩みは、同様に新しい、独自の性格を帯びた、というわけである。

……一九一七年十月までつづいた経済的破綻の危機の

アナキストに対しあらゆる宣伝ないし活動を禁止することから始めた。それは、大衆に、アナキストの声を聞かぬように、それを誤解するようにさせた。そして、その拘束にもかかわらず、アナキズム思想がひろまったので、ポリシエヴィキたちは、素早く、最も暴力的な手段に移った。つまり、牢獄、法律上の権利剥奪、殺戮である。そこで、一方は権力の座にあり、他方は権力に対抗する、二つの傾向の間の完全な闘争が激化し、拡大し、いくつもの地方では、本当の内乱となった。特に、ウクライナにおいては、この戦争状態が二年以上もつづき、アナキズム思想を圧殺し、それによって着想をえている大衆運動を粉砕するために、ポリシエヴィキたちに、彼らのあらゆる力を動員することを強いた。

そのようにして、社会革命についての二つの観念の間での、同時に、ポリシエヴィキ権力と勤労大衆のいくつもの運動の間での闘争は、一九一九—一九二一年の時期の諸事件の中で、きわめて重要な位置を占めている。

二つの対立する観念

……ポリシエヴィキの思想は、ブルジョア国家の廢墟の上に、新しい「労働者の国家」を建てること、「労働者と農民の政府」を組織すること、「プロレタリアート独裁」を樹立すること、であった。

アナキストの思想は、それらがどのようなものであろうと、政治的国家や、政府や、「独裁」にすぎること

中で、成就すべき社会革命の観念としてはポリシエヴィズムしかなかった。その政治的、権威主義的、国家主義的、中央集権的性格によってポリシエヴィズムと似通っている、(左翼の)社会革命党の理論や、その他のいくつもの類似の小流派の理論を語るのではなく、真の完全な社会革命を考えていた、第二の基本的な思想が、革命的な人々の間で、そして勤労大衆の中でもまた、明らかになり、普及した。それが、アナキズム思想であった。

初めはきわめて弱いものであったその影響は、いくつもの事件が重なるにつれて拡大した。一九一八年の終わり、その影響は、いかなる批判をも、さらに反対ないし敵対をも認めなかったポリシエヴィキたちが、真剣に心配するほどのものとなった。一九一九年以来一九二一年の終わりまで、彼らは、この思想の進展に対するきわめて激しい闘い、少なくとも反動に対する闘いが、そうであったほどに、長い激しい闘いを、つづけねばならなかった。

このことについては、あまり知られていない第三の事実を強調しよう。それは、権力の座にあるポリシエヴィズムは、イデオロギー的な、ないし具体的な経験の場ではなく、率直な誠実な闘争手段によってではなく、まったく暴力的な方法、それが反動に対して用いたのと同じ弾圧の方法によって、アナキストとアナルコ・サンジカリストの思想と運動と闘った、ということである。それは、絶対自由主義的な諸組織の本拠を暴力的に閉鎖し、

なく、社会の経済的、社会的な基礎を転換すること、つまり、資本主義の最後の政府を打倒したあとで、政治的、国家主義的な手段によってではなく、労働者自身の提携の、自然な、自由な、経済的な、社会的な活動の手段によって、革命を実現すること、その諸問題を解決することであった。

行動を調整するために、第一の観念は、政府とその手先の援けをえて、「中央」の絶対的な指令によって、国家の活動を組織する、中央政治権力を考える。

もう一つの観念は、政治的、国家主義的組織の決定的な放棄と、地区的な、地方的な、全国的な、国際的な、経済的・社会的・技術的諸機関、あるいはその他のもの(組合、協同組合、各種提携組織、等々)の、直接的な、連合的な理解と協力を仮定する。したがってここでは、政府の中央からそれによって命令される周辺へと向かう、政治的な、国家主義的なものではない、支配や指令ではなく具体的な必要性による、自然な、論理的な方法で樹立される、周辺から中央へと向かう、実際の必要と利害にもとづく、経済的な、技術的な、集中化が考えられている。

「破壊することしか」知らない、いかなる「肯定的な」思想も持っていない、とアナキストに対して行なわれる非難は、……その非難が「左翼」によって投げかけられる時、特に……いかにばかげたものか、あるいは底意のあるものか、指摘しておかねばならない。極左の諸政党

とアナキストとの間の討論は、……(誰もが用意していること)ブルジョア国家の破壊のあとで成就すべき……任務をつねに対象としている。その時、新しい社会の建設の形はどうならねばならないのか? 国家主義的な、中央集権的な、政治的なもの、それとも、連合主義的な、非政治的な、単に社会的なものか? そうしたものが、つねに両者との論争のテーマであった。それは、アナキストたちの基本的な関心事がつねにまさしく未来の建設にあった、否定しえない証拠である。

諸政党の主張、政治的な、中央集権的な、「過渡的な」国家に対して、アナキストたちは彼らの主張、経済的な、連合主義的な、真の共同体への、漸進的な、しかし即時の移行を対立させた。諸政党は、過ぎ去った諸世紀、諸制度から贈られた社会機構にもとづいてきた。彼らは、その原型が建設的な思想を含んでいる、と主張した。アナキストたちは、新しい建設は、初めから、新しい方法を要求する、と考えた。彼らはその方法を説いた。彼らの主張が正しいにせよ誤りにせよ、それは、ともかく、彼らが自分たちが望んでいたことを完全に知っていたこと、彼らが明確な建設的思想を持っていたこと、を証明している。

一般的に、誤った、ないし多くの場合、承知の上での不正確な解釈は、絶対自由主義的な観念は、あらゆる組織の不在を意味する、と主張する。これ以上に誤ったものは何一つない。問題は、「組織」あるいは「非組織」

に、何よりもまず、下部から出発して作られなければならない。組織の原則は、全体を独占しそれに従属させるためにあらかじめ作られた中心からではなく、まったく正反対のもの、調整の結び目、あらゆる地点に通ずるよう運動づけられている、自然な中心に到達するために、あらゆる地点から出発しなければならない。

もちろん、組織する精神が、組織することのできる人が、「エリート」が介入することは必要である。しかし、いかなる場所でもいかなる状況においても、あらゆるそれらの人間的な要素は、独裁者としてではなく、真の協力者として、共同の事業に自由に参加するものでなくてはならない。いたるところで彼らは、模範を与えねばならないし、支配し屈服させるないし抑圧するのではなく、組織することに努力しなくてはならない。それらの人々が、真の組織者であろうし、彼らの仕事が多様な堅固な真の組織を作り出すことであろう。なぜなら、自然で、人間的で、本常に進歩的であるからである。それに反して、抑圧と搾取の古い社会の組織を真似た、したがってそれら二つの目的に適応している、別の「組織」は、不毛であり、不安定である。なぜなら、新しい目的に適合していないし、したがっていさかも進歩的ではないからである。事実、それは、新しい社会のいかなる要素をも含んでいない。反対に、それは、古い社会のあらゆる欠陥を、その頂点にまで高めるであろう。という

ではなく、組織についての異なった二つの原則なのである。

あらゆる革命は、必然的に、いずれにせよ自発的な、したがって、混乱した、混沌としたやり方で始まる。それは当然のことであり、絶対自由主義者たちは、他の人々と同様に、もし革命がそのままにとどまるなら、革命的な飛躍のちただちに、他のあらゆる人間の活動の中におけるように、革命の中に組織の原則が介入しなければならぬ。そして、重大な問題が現われるのはその時である。いかなるものが、この組織の形であり基礎であるらねばならないのか?

ある人々は、中央の指導的なグループが、「エリート」のグループが、事業全体を手中に収めるように形成されねばならず、その観念にもとづいて事業を進め、その観念をあらゆる集団に強制し、政府を組織し国家を編成し、その意志を民衆に命じ、力と暴力によってその「法」を強制し、自分と一致しない人々と闘い、彼らを除去し、抹殺しさえしなければならぬ、と主張する。

他の人々は、そうした観念はばかげたものであり、人間進化の基本的な傾向と対立するものであり、要するに不毛なもの、意図した事業にとって不吉なものでしかない、と考えている。もちろん、社会は組織されねばならない、とアナキストたちは知っている。しかし、この新しい、正常な、今後ありうる組織は、自由に、社会的

のも、その外見だけしか変えていないからである。

あらゆる諸関係の下で、時代遅れた、旧式な、したがって自然な、自由な、真に人間的な制度であることと不可能な、社会に属している組織は、新しい詭計、新しい詐欺、新しい暴力、新しい抑圧と搾取の援けなしには、持続することができないであろう。それは、宿命的に、あらゆる革命を、歪曲し、誤らせ、危機に瀕せしめるものである。そうした組織が、社会革命の主動者として不毛であることは明らかである。それは、「共産主義者たち」が主張するもの、「過渡期の社会」として、いかなる形でも役立つことはできないであろう。というのも、そうした社会は、それが向かおうとする社会の芽を少なくともいくつかは持たねばならないからであるが、さて、権威主義的な、国家主義的なあらゆる社会は、失格した社会の残りものしか持たないであろう。

絶対自由主義の主張によれば、現実の必要にしたがって連合し集中化した、各種階級組織(工場委員会、産業と農業の労働組合、協同組合、等々)によって、……革命の……諸問題の解決にいたるところでその現場で専念しなければならぬのは、勤労大衆自身であった。……自由で意識的なものであるから強力に豊かな、彼らの行動によって、大衆は、国中全体で、自分たちの努力を調整しなければならぬであろう。「エリート」についていえば、絶対自由主義者たちが考えているようなその役割は、大衆を援助することであった。すなわち、大衆を

啓蒙し、教育し、必要な助言を大衆に与え、あれやこれやの発意に向かつて大衆をうながし、大衆に模範を示し、行動の中で大衆を支持することであり、政府を中心にして大衆を指導することではない。

絶対自由主義者によれば、社会革命の諸問題の望ましい解決は、自分たちの思想、自分たちの力や力柄、自分たちの才能、能力、意向、職業的な知識、手腕等々の多様さとともに、自分たちの必要や自分たちの利害のあらゆる多様さを、そこに持ち込み、そこで調和させる、いく百万もの人々の、自由に意識的に、共同し連帯した事業からしか、由来しえなかった。「エリート」の援助をえた、必要なら自由に組織された自分たちの武装勢力の保護の下にある、それらの人々の、経済的な、技術的な、社会的な機関の自然な活動によって、勤労大衆は、絶対自由主義者によれば、社会革命を効果的に前進させ、あらゆる自分たちの任務の実現的な実現に漸進的に到達することができなくてはならない。

ポリシエヴィキの主張は、まったく正反対であった。ポリシエヴィキによれば、「労働者の」と称する）政府を組織し（いわゆる「プロレタリアートの独裁」を行使し）、社会変革を追求し、その絶大な諸問題を解決しなければならぬのは、エリート——彼らのエリート——であった。大衆は、その計画、その決定、その命令、その「法」を、忠実に、盲目的に、「機械的に」実行しつつ、エリートを援けなければならなかった（エリートは

大衆を援助しなければならぬという、絶対自由主義者の主張とは逆の主張、である）。そして、これもまた資本主義諸国のものを真似た、武装勢力は、盲目的に「エリート」に服従しなければならなかった。

二つの思想の間の基本的な相違は、そうしたものであったし、現にそうしたものである。

そうしたものがまた、一九一七年のロシアの激動の時に、社会革命について対立した二つの観念であった。われわれがすでにいったことだが、ポリシエヴィキたちは、アナキストたちに耳を貸そうともせず、さらにアナキストたちが大衆にその主張をのべるのを放置しておくともしなかった。絶対的な、論議の余地のない、「科学的な」真実を持つていようと信じ、それを強制し大急ぎで実施しなければならぬと主張する、彼らは、絶対自由主義運動が大衆の関心を惹き始めるや、この運動と闘い、暴力をもって、あらゆる支配者、搾取者、審問者の常習手段によって、除去したのである。

ポリシエヴィキ国家とは何か？

……一九一八—一九二二年にその大略が整えられた、ポリシエヴィキ国家は、二十年來存在している。

この国家、それは明確には何なのか？

それは、社会主義ソヴェト共和国連邦（URSS）と称している。それは、「プロレタリアートの」あるいはまた「労働者と農民の」国家である、と主張している。

それは、「プロレタリアートの独裁」を行使していることを認めている。それは、「労働者の祖国」、革命と社会主義の城砦である、と自慢している。

これらすべての中に真実のものはあるのか？ 諸事実や諸行為は、これらの表明や主張を正当化するであろうか？

……権力の座にあるポリシエヴィキ党の第一の配慮は、すべての活動、国の全生活、国家統制化されうるすべてのものを、国家統制化することであった。問題は現代の用語法が「全体主義」と呼んでいるあの制度を、創設することであった。

ひとたび十分な強制力を持つや、ポリシエヴィキ党と政府は、その任務のために最善の努力を払った。

その任務を実現しながら、共産主義権力は、その巨大な官僚機構を作りだしたのである。それは結局、今日、二百万人ばかりの公然と特権的な階層を形づけている、官僚の数多くの強力な特権集団を仕立てあげた。国の、軍の、警察の効果的な主人であるこの特権集団は、その偶像、その「ツァー」、その特権を保護し「秩序」を維持できると思われる唯一の人物、スターリンを、支し、守り、崇拜し、うれしがらせた。

次第に、ポリシエヴィキは、行政全体を、労働者や農民その他の諸組織を、財政を、輸送と通信の手段を、地下労働者と鉱業生産を、外国貿易と国内の大商業を、大工業を、土地と農業を、文化を、教育を、言論と文学

を、芸術を、科学を、スポーツを、娯楽を、思想をすら、少なくともそのあらゆる表現を、たやすく、素早く、国家統制化し、独占し、「全体主義化」した。

労働者の諸機関、ソヴェト、組合、工場委員会等々の国家統制化は、最も容易であり、最も速かった。それらの独立は、廃止された。それらは、党と政府の、単なる管理と執行の機関となった。

勝負は巧みに進められた。労働者たちは、彼らが縛りあげられつつあることに気づきもしなかった。なぜなら、国家と政府は、今では「彼らのもの」であったからで、それから離れないことが、彼らには自然に見えたのである。彼らは、彼らの諸組織が「労働者の」国家の中でその役割を果たすこと、「同志である人民委員」の決定を実施すること、を正常なことと見ていた。

間もなく、いかなる自治的な行動も、いかなる自由な身振りも、それらの諸組織にはもはや許されなかった。諸組織は、結局、自分たちの誤りを悟った。しかし、それは遅すぎたのである。「ソヴェトの王国の中には何かしらうまくゆかない」ものがあることを感じ、行動を妨げられ、不安を覚えたいくつかの組織が、何らかの不満を表明し、わずかの独立をふたたび獲得しようとした時、政府は、そのあらゆるエネルギーを用い、あらゆる術策を弄して、それに反対した。一方では、政府は、処分と制裁を行なった。他方では、その理由づけに努めた。政府は労働者たちにこの世で最も自然な調子でい

た。「われわれは今や労働者の国家を持つている。そこでは、労働者たちが彼らの独裁を行使している。そこでは、すべてが彼らのものだ。この国家とその諸機関は、諸君のものだ。その時、どのような「独立」が問題になりうるだろう。そうした苦情は、今ではナンセンスだ。何から独立するのか、何から？ 諸君自身からか。なぜなら、国家、今では、それは諸君だ。それを理解しないことは、成就された革命を理解しないことだ。この事態に反抗することは、革命そのものに反抗することだ。そうした考えや運命は、寛大に取扱うことができない。なぜなら、それらは、革命の、労働者階級の、その国家の、その独裁の、労働者権力の、敵によってしか、勇気づけられないからである。諸君の若い国家の中では、すべてがまだ見事にはいっていないので、敵のささやきを聞き、敵の不吉な示唆に耳を貸すほど、諸君の間でまだ自覚のないもの、彼らは、真の反動的行為を犯している」

ポリシエヴィキの制度

……ポリシエヴィキ制度は、国家であり経営者であるものが、各市民にとつて、先駆者であり、道徳の指導者であり、判事であり、報奨と処罰の配分者であることを望んでいる。

国家は、市民に労働を提供し、職を指定する。国家は、市民を養い、給料を支払う。国家は、市民を監視する。……ポリシエヴィキ制度は、国家であり経営者であるものが、各市民にとつて、先駆者であり、道徳の指導者であり、判事であり、報奨と処罰の配分者であることを望んでいる。それをあえて批判し、それにあえて抗弁し、何についてであろうとあえてそれを非難するすべての人、あるいは集団は、政府の敵、真実の敵、革命の敵、「反革命者」と見なされるのである！

問題は、そこでの、意見と思想の真の独占である。国家（ないし政府）のもの以外のすべての意見、すべての思想は、異端、危険な、承認しえない、罪となる異端と見なされる。そして、論理的に、必ず、異端者の処罰が行なわれる。牢獄、国外追放、死刑執行である。

単に革命について独立した意見をあえて持っていたので、残忍な迫害を受けたサンジカリストやアナキストは、そのことについて何かしらを知っていた。

読者が見られるように、この制度は、民衆の完全な絶対的な隷属、物質的な精神的な隷属の制度である。お望みならば、これは、新しい怖るべき社会面における異端審問所である。そうしたものが、ポリシエヴィキ党によって成就された事業である。

党は、この結果を求めたのか？ 党は、承知の上でここに来たのか？

確かにそうではない。明らかに、その最良の代表者たちは、真の社会主義の建設を可能とする、完全な共産主義への道を開く制度を熱望していた。彼らは、彼らの偉大なイデオログたちによって説かれてきた方法が、絶対的間違いなくそこに導いてゆく、と確信していた。他方で彼らは、彼らが目的に到達すべき時、すべての手

る。国家は、市民を使用し、自分の意のままに扱う。国家は、市民を教育し、調教する。国家は、市民を裁く。国家は、市民に報いるか罰するかする。使用者、扶養者、保護者、監視人、教育者、調教者、判事、牢番、死刑執行人、——同じ人格の中に、官僚たちに援けられて、どこにでも存在し、全知であり、全能であろうとする、国家という人格の中に、すべてが、絶対にすべてがある。それをのがれようとするものには不幸が訪れよう！

ポリシエヴィキ国家（政府）は、既存のあらゆる物質的精神的な財産を奪ったのみではなく、さらに、おそらくこれは最も重大なことなのであるが、あらゆる領域における、あらゆる真実、歴史的、経済的、政治的、社会的、科学的、哲学的、ないしその他の真実の、永遠の横領者にもなったのである。あらゆる領域で、ポリシエヴィキ政府は、絶対に誤りを犯さないもの、人類を導くよう運命づけられているもの、と自分を見なした。政府のみが真実を持つ。政府のみが、どこに、いかに向かうかを知っている。政府のみが、よく革命にまで導くことができる。そこで、論理的に、宿命的に、政府は、国に住んでいる一億七千万の人々が、彼らもまた、政府を真実の唯一の所有者、絶対に誤りを犯さない、非の打ちどころのない、聖なる所有者、と見なさなくてはならない、と主張する。そして、論理的に、不可避的に、この政府と闘うのではなく、単にその無謬性をあえて疑い、

段はよいものであり、正当なものだ、と信じていた。

彼ら、あの真摯な人々は、間違ったのである。彼らは、誤った道を進んだ。

そのために、取り返しつかない誤ちを理解し、消え失せた希望のうちに生きながらえることを望まなかつた、彼らのうちのいく人かが、自殺した。

もちろん、大勢への順応主義者や出世主義者は、自分を順応させた。

私は、ここで、数年前、緊迫した情熱的な討論の際、すぐれた誠実なポリシエヴィキが私に対して行なった告白を、どうしても記録しておきたい。彼は私にいった。「確かにわれわれは、道に迷い、われわれが到達しようとして望みも考えもしなかつたところに飛び込んでしまった。しかしわれわれは、われわれの誤ちを改め、袋小路から出て、正しい道を再発見するように努力するだろう。そこで、われわれは、成功するだろう」

反対に人は、彼らは成功しないこと、彼らはそこから決して出られないことを、絶対に確信しうる。なぜなら、事態の論理的な力、一般的な人間の心理、物的な事実の連鎖、原因と結果の限定されたつながりは、それらの人々がいかに強力であり誠実であろうと、いく人かの人々の意志よりも、要するに、強いのである。

ああ！ もし、自由な幾百万の人々が間違っただとしたら、もし、まったく自由に、まったく率直に、完全に一致して行動する強力な集団の問題だとしたら、人々

は、意志の共同の努力によって、欠陥を償い、状況を立て直すことができたであろう。しかし、そうした任務は、自分たちを支配する巨大な力を前にし、屈服させられた受身の人間大衆の外や上におかれた、何人かのグループにとっては不可能である。

ボリシェヴィキ党は、国家による、政府による、中央集権的な、権威主義的な、政治行動による、社会主義を建設しようとした。党は、「機械的にされた」、盲目的な無自覚的な大衆の醜悪な搾取にもとづく、途方もない、危険な国家資本主義にしか到達しなかった。

党の指導者たちが誠実であり、精神的であり、有能であった、彼らには広汎な大衆がしたがっていた、と証明されればされるほど、彼らの事業から引きだされる歴史的な結論が、ますます見事なものとしてそこから生まれよう。その結論とは、次のようなものである。

国家や政府や政治行動に援けられて社会革命を成就しようとするあらゆる企ては、その企てがきわめて誠実であり、きわめて精神的であり、状況によって有利なものであり、大衆に支配されていたとしても、宿命的に、社会主義社会に向かう人類の進歩と絶対にかなるかわりもない国家資本主義に、資本主義の中で最悪のものに、到達するであろう。

こうしたものが、ボリシェヴィキの恐るべき決定的な経験の世界的な教訓であり、絶対自由主義の主張に強力な支持を提供する教訓であり、そして間もなく、諸事件

に照らされて、苦勞して働き、苦しみ、考え、闘うすべての人々によって理解されるであろう、教訓である。

“ナバート”の諸会議

ここには今、ヴォーリンがその中心的活動家の一人であった、ウクライナのアナキズム運動、「ナバート」の会議ないし大会に関する三つの記録がある。これらの文書は、アナキズム史家ウーゴ・フェデリの重要な著作「ウクライナにおける農民の蜂起からクロンシュタットの反乱まで」(ミラノ、一九五〇年)からの抜萃であり、その翻訳である。

ウクライナのアナキスト組織(ナバート)の 第一回会議

(一九一八年十一月十八日)

このたび開催され、きわめて重要であった会議は、その第一の義務として、「アナキズムのあらゆる発刺たる力を組織すること、アナキズムの異なる諸潮流を統一すること、組織された大衆のための、社会生活の新しい形態の(いづれにせよ)長い創造の過程として定義される、社会革命に積極的な役割をまじめに果たそうとするアナキストたちすべてを、共同の仕事によって統一すること」を決めた。

この会合における議事日程の最も重要なものの中の、もう一つの要点は、「マフノールの」「反乱運動」にかかわる第三点であった。決定は、明確で、率直である。それは、以下の点をはっきり述べている。

a 各種の反動勢力に対する、ウクライナを占領し、そこを拠点として利用しているすべてのものに対する、闘争を活性化させる必要。

b その闘争の中にアナキズムの精神を導入し、そうすることで、来たるべき勝利のために、そして革命の力の組織のために、アナキストの力を強化する必要。会議は、ウクライナの反乱運動にアナキストたちの広汎な積極的な参加の必要を認めた。

アナキストのみの組織の不成功と否定的結果は、経験によって証明されたので、会議はそうした組織の無益さを確認する。

アナキストのあらゆる種類の反乱分子の組織および非アナキスト組織への参加については、会議は以下の点をはっきり述べている。

1 あらゆる種類の反乱組織への、特にアナキストたちによって組織された、無党派の反乱分子(労働者と農民)の組織への、アナキストの参加は欠くべからざるものである。

2 各種の反乱組織(戦時革命委員会、参謀部、等等)へのアナキストの参加は、以下の条件内で可能である。

a 戦時革命委員会や類似の組織は、アナキストによって、(軍事作戦行動のみを指導する)単に技術的、執行的機関とだけ見なされなくてはならない。それに反し、いかなる口実の下でも、それらは、どのような形であろうと、権力の問題を提起する、あるいは、権力を手中に握る、管理的ないし執行的な機関と見なされてはならない。

b アナキストたちは、政党の、ないし、権威主義的な、機関の性格を持つ組織(戦時革命委員会、参謀部、等々)に参加してはならない。そうしたところにおいては、アナキストたちは、諸政党の外に、類似の組織を作るために、全力を尽くさなくてはならない。

c アナキストたちは、政治的な、また党の性格も、権威主義的な性格も持たない組織と、協力しうる。アナキストたちが協力していた組織が、政治的な、党の、組織に変わった場合、アナキストたちは、それを離れ、別の類似の組織を作らなくてはならない。

d アナキストたちは、戦時革命委員会がないところに、それを設立する。

たとえば、決定的な闘争の危機のような例外的な場合、そして、革命の防衛がそれにかかっている時、政党の性格を持つにせよ、軍事革命組織への、アナキストたちの一時的な参加は、許される。

る。しかしながら、それは、情報に関する目的のみ、許される。

会議は、特に、以下のものの不可避的な必要性について、活動家たちの注意を喚起した。

1 軍事編制の組織の中に閉じこもってはならないこと、単なる戦闘員であることに甘んじてはならないこと、そうではなく、それらの組織のメンバーの中で、アナキスト的な性格の思想と慣習とを發展し強化するように試み、自由にできる時間すべてを、宣伝活動に捧げること。組織のメンバーたち自身の活動や創意を自覚させること、アナキズムの、精神的、文化的原理や基本的な思想を教えること、が必要である。

2 組織という狭いサークルの中に閉じこもらないこと。そうではなく、言葉や行動によって、反乱分子への民衆の共感をうるためにできるだけのことをし、自覚的な積極的な、革命の仕事を發展させ、そうすることで効果的に反乱分子を支持するよう民衆を導き、組織の活動と民衆の生活とを常に一体化するよう試みることに。

ウクライナの組織(ナバート)の第三回大会

(一九二〇年九月三十一日)

ナバート連盟のメンバーの第三回大会は、特に困難な状況の中で開かれた。「一九一九年」三十四月の第二回大会のあとで、同じ年の八月にまた大会を開かねばなら

なかった。しかし、それは、白色將軍デニキンによって六月に火蓋を切られた攻勢のために、開催することができなかった。

この攻勢とその結果であるデニキン軍の前進は、諸組織間の、可能な結びつきそれぞれを打ち砕くものとなった。結局、ナバートの書記局自身が解体し、そのメンバーは逃亡した。彼らのうちの一人は、一九一九年秋に、白軍によって投獄された。他の二人は、マフノー運動の戦列に合流し、彼らとともにデニキンと闘った。第四の男(ヴォーリン)は、モスクワで逮捕された。

こうした条件の下で、作業は秘密裡に再開されることとなり、法外な困難とぶつかり、きわめて限られた成果しかえられなかった。したがって、第三回大会は、一年半遅れて、数多くの諸事件が以前の状況と立場とを変えたのちに、開催された。

チェカー(ポリシエヴィキ警察)の統制と臨席の下に開かれたこの大会において、人々は特に三つの点、①原則、②組織、③戦術について討論した。

重要な、重大な諸決議が承認された。

原則については、大会参加者の一人が、次の問題に明確な回答をするよう、要求した。「アナキズムの基本的な諸思想は、革命の諸教訓を汲んで、いくらかの訂正を受け入れうるのか?」

こうした問題が提起されたという事実そのものが、説明を与えることが必要であることを証明している。ポリ

シエヴィキが考えているものにずっと近い路線にアナキズムを導こうとする、いく人かの人々の配慮、そしてまた革命を深化させ防衛しようとする配慮が、この大会を、これまで開かれた最も重要な大会の一つとした。人が専念していた諸問題の中で、それが必然的に伴わねばならないいっさいの結果を含む、「過渡期」の問題、それと「労働の独裁」の問題が、優先していた。これらの問題は、ある瞬間には、各潮流が、一致を決して見出せまい、分裂は必至だ、と思われたほどに、活発な、激烈な討論をもたらした。

しかし、大多数が同意した最終的な決議は、それら多数の問題の中で、アナキストの観点を明らかにしている。以下が、その文書の要点である。

一九二〇年九月三十一日に開かれたウクライナ・

アナキスト・ナバート連盟大会で採択された決議

ポリシエヴィキたちからロシアのアナキストたちを引き離した重大なイデオロギー的相違を、きわめて明確に断乎として述べている以下の決議の重要性は、改めて強調するまでもあるまい。この決議は、当時まだモスクワで拘禁されていた、ヴォーリンの不在中に可決された。

1 もしアナキーを見棄てた人々が、革命はアナキズム理論の弱点を証明した、と断定したとしても、それにはいかなる根拠もない。反対に、アナキズムの教えの

基本的な諸原則は、信じられないほど強固なものとして残っており、それはさらにロシア革命の経験によって確認された。

それらの事実が、あらゆる形の権威に対する闘いの中に、断乎としてとどまらねばならぬ必要を証明している。

2 アナキストは、絶対自由主義的な傾向を帯びている革命の初期と、アナキーの最終的な目標、アナキスト・コミュニティとの間に、古い隷属の名残りが消えてゆき、自由な提携の新しい形が効果的に練り上げられる、そうした期間が挿入されねばならない、ということをご否定する。不確定、誤り、そしてまた絶えざる改善に満ちているこの時期は、「反権威主義的な経験の蓄積の時期」、ないし「社会革命の深化の時期」、さらにまた「アナキズム的なコミュニティへの過程」と、さまざまに呼ばれる。

この過渡期を、慣例的に「社会生活の完全な形への移行」とも呼びうる。しかし、われわれはこの決まり文句の使用を勧めない。なぜなら、それは、最近五十年間の社会運動によって、明確なごく特殊な意味を帯びているからである。

「過渡期」という思想からは、何かしら決定的な、固定した、硬直した思想が生まれている。

「過渡期」という表現は、社会民主主義インターナショナルの綱領の中で使われ、歴史的マルクス主義精神が滲

み込んでいて、そのためアナキストにとってはそれは受け入れられないものとなった。

3 われわれはまた、その採用をちとろうとしていく人かの同志たちの努力にもかかわらず、「労働の独裁」という表現を用いることも拒否する。この「労働の独裁」は、散々に破産したままとなっている「プロレタリアートの独裁」以外のものではない。結局、それは、宿命的に、プロレタリアートの一分派の、特に一党の、官僚たちの、いく人かの隊長たちの、プロレタリアート大衆に対する独裁に到達する。

無政府思想は、どのような独裁とも、それが他の労働者たちの利益を目的としたものであるにせよ、階級的意識を持った労働者たちの、他の労働者たちに対する独裁とも、相容れない。

……ひとたび「独裁」の概念が認められるや、人はしたがって……国家の力の、残忍な無制限の支配を受け入れるであろう。独裁の思想のアナキストの綱領への導入は、諸精神における許しがたい混乱に達するであろう。

4 アナキズムによって説かれた革命、そこでは共産主義の原則と権威の非使用の原則が優越している革命は、その発展の過程で、多くの困難に出会う。権威主義的な資本主義制度の維持に関心を抱いている、積極的に抵抗する勢力と、労働者大衆の受身と無知は、自由な、組織された、アナキスト・コミュニティに、その理想から遠ざかるように強いる、状況を生みださしめる。未来の各

種の社会的形態を具体的に明示することは、それらの総体が現実となるはずの、各種の力の質的、量的な内容をわれわれが知らないという事実によって、不可能なことである。その理由によって、われわれは、未知の未来のための計画を樹てることを無益と考える。

われわれは、「最小限の綱領」を作製しないであろう。われわれは、アナキズムと共産主義の理想を明確に完全に示すために、労働者大衆の前で公然と、確乎たる信念をもって、現実の諸事件の中で、直接に行動する。

この第一の部分、可決された諸決議の中の要点のほか、さらに別の点も検討された。すなわち、結局「ソヴェト権力との諸関係」を絶つための、「ロシア全般における、そして個別的にはウクライナにおける、状況」についてである。

これらの最後の討議については、以下の点を強調することが重要である。

あらゆる形の国家に対する絶えざる闘いの中で、ナバート連盟のアナキストたちは、いかなる妥協も、いかなる譲歩も認めなかった。

われわれはしばらくの間、さまざまな形で、「ソヴェト権力」ともに行動した。

十月革命の力強い飛躍、……ボリシェヴィキの「指導者たち」の空々しいアナキズム的な演説、動乱から生ま

れた革命を鉄の包囲の中に閉じこめる、世界帝国主義に対する闘いの緊急性、これらすべては、ソヴェト権力へのわれわれの反対を制約した。

われわれは、労働者農民大衆に、革命を強化するように促した。われわれは、新しい支配者たちに忠告を与え、彼らに同志的な批判を下した。

しかし、革命から生まれたソヴェト権力が、三年の間に支配の強力な機構となった時、革命は圧殺された。

(ブルジョアのいない)「プロレタリアートの独裁」は、ブルジョアのかわりに、一党の、プロレタリアートの微細な分派の、全労働者民衆に対する独裁をおいた。この独裁は、広汎な労働者大衆の声を押し殺した。そのようにして、革命の各種の問題をそののみが解決しえなはずの、創造的な力は消滅した。

1 このヴォーリンの紹介は、「知られざる革命」の冒頭にある「ヴォーリン友の会」によって公表された伝記にもとづいている。一三五ページには、ネストル・マフノーの紹介がある。

2 印刷された、そしてヴォーリンがついでフランス語に訳すつもりでいた、この貴重な記録は、決して再発見することができない。それについては、短い引用しか知られていない。

3 二二二ページ以下を見よ。

- 4 ブリュドモオについては、二七一ページを見よ。
 『知られざる革命、一九一七—一九二二年』(一九四七年)からの抜萃。この書は、出版者とヴォーリンの家族の無報酬の許可によつて、一九六九年にピエール・ベルフォン社から再版された。(邦訳名は、第二部が「一九一七年・裏切られた革命」、第三部が「知られざる革命」ともに現代思潮社、野田茂徳・千香子訳。第一部は未訳)
 8 ヴォーリンの証言。『知られざる革命』への未刊の《結論》からの抜萃。
- 7 われわれはロシアで、そしてのちにフランスで知り合つていた。彼は、私のように、一九一六年に、フランスから追

- 放された。(ヴォーリン注)
 見出しは編者による。
 9 Dgo Fedei (1898—1964) ウィル・トレニとも署名していたイタリアのアナキスト、マテスタの弟子、一九四五年までイタリアから国外追放されていた。カミロ・ベルネリ(二九〇ページを見よ)の同郷人で協力者。一九三六年に反ファシスト・スペインのために尽くし、ベルネリとともに新聞「階級戦争」を編集した。イタリアへ帰ると、歴史的な諸著作を発表した。
 10 デニキン、I巻二一四ページを見よ。

ネストル・マフノー 1889—1935

ネストル・マフノー、アナキスト・ゲリラ

十月革命の直後、貧農の子で、ネストル・マフノーと名乗る、若いアナキストが、南ウクライナの農民大衆を、自治的な形で、社会的にも軍事的にも、率先して組織した。すべては、ドイツとオーストリアの占領軍の圧力で、右翼の制度がウクライナにおいて樹立されたことから始まった。それは、革命的な農民が奪い取ったばかりの土地を、旧地主たちに急いで返却したのである。土地労働者たちは、彼らの真新しいあらゆる獲得物を、武器を手にして防衛した。彼らはまたそれを、反動に対してとともに、農村における、ポリシェヴィキ人民委員の、機宜を失した無理な割込みと、そのあまりにも重い徴発に対して、防衛した。

このゲリラの両面での大規模な暴動は、一人の理非曲直を明示するもの、農民たちから、親父マフノーと渾名されていた、一種のアナキスト・ロビンフッドによつて動かされていた。十

一月十一日の休戦は、ドイツ・オーストリア占領軍の撤退をもたらし、それは同時に、マフノーに、武器と物資の貯蔵を行なう唯一の機会を与えた。

マフノー運動の諸大会は、農民の代表と戦闘員の代表とを集めていた。事実、非軍事組織も、農民反乱軍の延長であつて、ゲリラの戦術を用いていた。反乱軍は、驚くべきほど動的で、単にその騎兵の行動によつてのみではなく、馬に曳かれるスプリング付きの軽車両で移動する歩兵によつても、日に百キロも踏破することができた。この軍隊は、特に絶対自由主義的な、志願兵制の、あらゆる段階で実施されている選挙の原則の、自由に同意された規律の、基礎の上に組織されていた。その規律の諸規則は、バルチザンの諸委員会で練られ、ついで総会によつて効力を認められ、全員によつて厳格に守られていた。

「一九一九年秋に、デニキンの反革命軍を絶滅させた名誉は、主としてアナキスト反乱分子のものであつた」と、マフノー運動の記録者ビョートル・アルシーノフは書いています。

しかし、マフノーは、彼の軍隊を、赤軍司令官トロツキーの